同窓会だより

発行所
岐阜県立関高等学校
同窓会会長大塚暉夫
印刷所
ムトウプリント
電話関2-3155

内・外面の充実を期して

学校長　巽　幸彦

本館の完成

昭和四十七年度から三期に分けはじめられた本館の改築工事は、昭和四十九年十二月二十日を以て完了し、木造二階建、旧校舎に残されていた第一学年の三クラスも本館に移り、新春から全校の生徒諸君が鉄筋四階、三八五三・二七㎡の本館で授業を受け、生活できるようになったことを心からの慶びと致して居ります。

木造校舎としては、家庭科の棟、中舎の一部、理科教室だけとなり、先輩、同窓会員各位が昔を偲ぶよすがは残り少なく、施設に関しては、関高の面目が一新したと申しても過言ではありません。偏に関係各位と同窓会諸兄諸姉、並びに歴代の校長はじめ諸先生方の長年にわたる本校への御尽力と御労苦の賜ものと心深く感謝申し上げます。

本館の完成により、関高現代化への全構想は、漸くその半ばに達した感がございます。新体育館と特別教室棟（理科・家庭・芸術）の建設並びに造園をはじめとする環境の整備等が急務とされて居ります。偶々高度成長の終焉とともに県財政のむずかしい折に、機等もあって、至難を覚悟してかからねばなりませんが、計画推進に全力を傾けたい所存です。どうか、倍旧の御協力と御鞭撻を賜わりますようお願い致します。

新学区制と本校

四十九年度から中学区制となり、美濃学区（関・美濃・郡上）の中学生は岐阜地区の高校へ進学できなくなりました。地域の中心校である関高では、生徒の質的向上が期待され、大学への進学について地域の要望もまた、大きいことは必然の理であります。

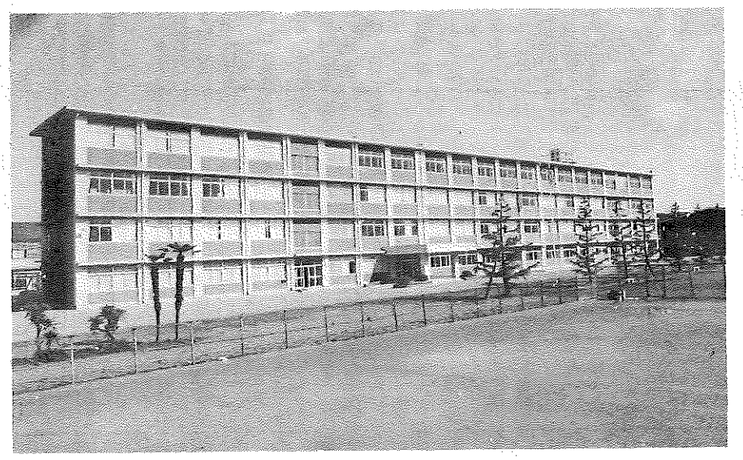
関高に着任して十ケ月余り、職員各位と十分な協議を重ね五十年度を期して、次の三点を実施し、勉学への体制づくりに鋭意邁進いたしたいと思って居ります。

一　2学期制から3学期制への切替え

自主的にどんどん学習してゆける生徒をのぞいては、考査の範囲が広い2学期制より、狭い範囲で、受けた授業を復習・整理することが、理解を容易にし、日常の授業を大切にすることになるのではないか。

次に、2学期制では夏休み前、七月に区切りがないので父兄との懇談に資料が乏しい。ずるずるっと夏休みに入り、九月の下旬に期末考査、十月に学校祭では、落着けるのは十一月頃になる。高校生活への導入の段階で実質がともなわず、ひいては大学への進学体制に非常な遅れをとっているのが2学期制であります。

以上のことから、メリットのある3学期制をという職員の要望もあり、年間の学校行事を洗いざらい再検討いたし居ります。



二　部活動加入は入学時に全入　九月から任意制に

部活動の加入は本来、任意的なものであります。しかしながら、任意には選択の自主性が裏づけされておらねばなりません。入学したばかりで高校が何も分からない生徒に選択の自主性を問うこと自体が無理な話であります。関高の伝統とも関連して、高校生活への適正な導入を考える場合に、部活動への一年生全入は意義深いことと思われます。ただ、生徒諸君が任意の意味を知り、自分の生きる道に選択を誤まらないためには、九月上旬に任意制に切替えることが最も妥当なのではないかと考えております。

伝統もあり、因習もあり、従来の行きがかりもございますから、生徒の指導に適正を期するためには、何よりも全職員の意志統一が肝要と心得ますし、卒業生の皆さんに、御協力をお願いいたさねばなりません。

以上の二件は、学区制改革にともなう、関高の今後の方向づけに重大な意義を持ちますので、職員各位の十分な了解を、地区の他の高校にもご連絡申し上げて慎重に対処いたしたいと思います。

三　教育相談の重視

県下の高校生徒指導をお預りして、教育相談の重要さを痛感いたして居ります。個々の生徒を大切に育てあげるためには、経験と勘ばかりではなくて、科学的な生徒理解の方法、又、それを表面だてない根気と配慮。対話と共感なくして教育は成り立たないとまで極言してもよろしかろうかと思われます。教育相談にも重点を置きたい念願です。

おわりに、県下に偉容を誇る桜ケ丘会館、二階の図書館では、PTA各位の格別なお力添えに依り、本年七月より冷暖房設備が整い、その機能をフルに運転、活用いたして居ります。

現在、県下の古い高校では、ようやく同窓会館建設に躍起でありますが、思うにまかせず、幾千万費して細やかなものしか出来上らないのを見るとき、同窓会諸兄諸姉の先見の明とご労苦、母校への思慕の深さに、ただ、頓首して感謝の意を表するばかりでございます。関高のいよいよの発展のため、後輩の一段の飛躍と多幸のため、今後とも、深い御庇護と御激励を賜わりますようお願い申し上げます。

短信コーナー

◈　定例幹事会開催

会則第九条にもとづき、定例幹事会を開催いたします。日時は昭和五十年五月十一日（日）、詳細は追って連絡いたしますが、幹事（各回同窓委員の代表者）のご出席をお願いいたします。

◈　新名簿発行について

会則第十条にもとづき新しい同窓会名簿が昭和五十年三月に発行されます。

昭和四十九年度の行事として、総会と並び重要な事業として、名簿の改訂が行なわれました。

改訂作業は、役員会で各回委員の中より名簿作成委員を委嘱して、名簿作成委員会が組織され、この委員会を中心として、委員および一般会員の方々によって調査が行なわれました。

会員数も一万名をこす規模となり、多方面にわたって活躍しておられる会員の動向を正確に把握することは、非常に困難だったようです。

さいわい、委員の努力と有志ならびに大塚印刷のご協力によって、発行のはこびとなりました。

会員の親睦と同窓会の一層の発展に大いに役立つことと期待されます。

新しい名簿は、一冊千円です。すでに予約申込も多数いただきました。ご希望の方は関高の同窓会係へお申込下さるか、各回委員でとりまとめをお願いいたします。

北から南から馳せ集う同窓生

高校四回卒　五十嵐　義行

昭和五十年正月三日、関商工会議所正面玄関に初春にふさわしい色どりをした「関高四回生同窓会場」の看板がかかげられ、道行く人の目をひきつけた。

正一時になると三階大ホールは正月らしい着物姿、背広姿でざわめいた。「やあ！卒業以来だね。」「あの方、どなた、全然思い出せないわ。」とはなやいだ雰囲気の中にも、懐しさが満ち満ちていた。この日の為に新幹線を乗りついで、たった今、東京から駆けつけてきた者もいた。

第四回卒業生は昭和二十七年卒業の終戦っ子である。校舎は武儀高女の跡、トイレも女子用ばかり、まさに肥え桶ずばりを代用していた。授業も教室のないため二部交替制で、登校する者、下校する者が、互いに途中で「やあ、お先に。」といった時代であった。それだけに二十三年振りの再会はひとしおである。

開始の時刻がせまってくると、早川、安田、鈴木、伊藤、平田、相宮、中村、深川各先生をはじめとする旧師・恩師の方々のご到着がつぎつぎ告げられる。果ては、この日、この時を目指して雪国、福井県から、はるばると足利先生が見えられた。

四回生同窓会は、これまでもしばしば持たれていたが、今回のように同窓生八十名、恩師二十名、総勢百名に至る参加者を得て、然も郷里の地で開催されたのははじめてであった。

会場に掲げられた「関高4回生同窓会」の大横断幕の下には、往時の高校生活にかえり、稚気と熱気でむせかえっていた。悪童仲間の話しは花に花が咲いて、時のたつのも忘れていた。室生犀生の詩に〝ふるさとは遠きにありて思ふもの、そして悲しくうたふもの〟とある。それもいいがやはり〝ふるさとは近きにきて眺め〟そして昔の仲間と顔をつき合わせ、息をはずませて語るのがよろしい。

安桜山の木々は青く、静かなたたずまいを見せている。時至り国光先生の音頭で「4回生同窓会万歳」。記念写真撮影のあと散会するも、去り難く、あちらでひとグループ、こちらでひとグループと語り合いが続く。ようやく会場片付の音で席を立ったものの、時刻は午後七時近くになっていた。外へ出ると本町街を通り抜ける風は厳しさの中にも春を呼ぶ、ある新鮮さが見られた。

スポーツと私

高校十七回卒　林　伸男

私は中学・高校・大学、そして社会人と、今日まで十六年間、野球に没頭し、今なお続けております。その間、勉学とは縁遠いものでありました。然し野球を通じて勉強させられたことが多々あり、また、それが何にも代え難い大切なものであったことを確信しています。

その一つに『自らトライ・アンド・エラーに取り組むことのない人間に、真の進歩はあり得ない』と悟ったことであります。私は過去、何度となく失敗を重ねてきました。その度に野球への限界を感じ何度も止めようかと思いました。然し、『もう一度挑戦をしてみるんだ』ということを繰りかえし今日に至りました。『何故駄目だったのか』『どうしたらうまくできるのか』『何故こうしたらよいのか』を考える機会を与えられ、考えることの大切さを知らされました。スポーツは頭で理解していても『知っている』ことにはなりません。身体で覚え、頭で理解していることをグランド上で実際にやらなければ『知っている』ことにはならない。それには、『考えたことを実際にやってみる』ことしか方法がないのです。

誰でも自分の能力を高めようとする時、一度や二度の試み（トライ）で自分の能力の限界を突破できるものではないでしょう。自分の限界を拡げようとすることは、別の表現でいえば、『できないことができるようになる』ための努力だからです。従って、失敗は常に存在するし、失敗を恐れていては進歩はあり得ません。だから一番大切なのは恐れることなく試行錯誤（TRY AND ERROR）を繰り返すことであると信じます。

常に上級学校への入試に迫われている現在の少年達は、もし与えられた路線からはずれ、何かをトライし、失敗すれば、それを回復する時間がないかも知れない。入学率のみを考える教師、浪人を恐れる親達にしてみれば、トライせず、与えられた路線を素直に進んでゆく子ども程『良い子』なのだろう。『良い子』になるためには、エラーをしないためには、どうしたらよいのか？。答えは簡単だ。トライしなければよいのです。与えられた課題を表面的にこなすことだけに専念し、自ら『トライ・アンド・エラー』に取り組むことのない人間に真の進歩はあり得ないと私は信じています。勉学に於て自己の充実に向って精進することの大切なことは、いうまでもありませんが、スポーツはそれ以上に素晴らしい人間形成の場であることを声を大にして叫びたいのです。

（西濃運輸野球部主将）

母校の思い出

高校十九回卒　稲垣克巳

卒業して早くも八年、母校の前を通るたびに、あんな事があった、こんな事もと、昨日のようになつかしく浮んできます。中でも悪友と、よく おとられた先生が、一番記憶に残っており、その悪友が今では信頼できる友である。とにかくベビーブームの中での学生生活を送り、ともすれば、友達、即ライバルという気運の中で、すばらしい友達が多くえられた事は、大きな収穫でした。

これは、我々のクラスが就職コースという事もあり、実にゆったりと、まとまりのあるクラスであったからでしょう。それゆえ毎年のクラス会には女性の参加も多く、楽しくやっております。

写真はその一コマですが、我が母校においては、縦のつながりが、まったくというほどありません。その方面の充実と「同窓会だより」の発展を願っております。

編集後記

▼　「同窓会だより」第3号をおとどけします。ささやかな会報ではありますが、恩師中村保先生の相変らずのご壮健ぶりをほうふつとさせる「四国めぐり」、会員各氏のご寄稿も、同窓生の多方面での活躍をしのばせます。中村先生はじめ各氏には、ご多忙にもかかわらず、ご寄稿いただき紙上にて、お礼をのべさせていただきます。

▼　今年も又、三百十六人の新入会員を迎え、関高同窓会も一万六百五十四人となりました。大塚会長を中心に一層の発展を期待したいものです。

▼　関高も新学区制への移行、大学進学問題など、転機にあります。母校の今後に我々も大いに関心をもち、暖かく見守りたいものです。

四国一周

中村保先生

○ 初めに

電車やバスの中で、古い卒業生に会うと、『お久し振りで御座います、お達者で結構です』と言って下さる。そして、必ず『お幾つになられましたか』と来る。

私は、こう答える。

『今年の書初めは、えとうの兎を描いて、

金烏玉兎忽々間
迎八十二歳之春

と、自讃しました』と。

人間は、老ゆれば、脳軟化症を来す宿命がある。之を少しでも予防するには読書と旅行が一番いいという事だ。

私は昨年初夏、四国一周の旅をして来た。そして其記録を上梓し、小冊子を作ったが、ここに数項を摘録して、『同窓会便り』編集の方達の請に応えようと思う。

四国一周は、行程三百六十里、弘法大師の遺跡をつなぐ所謂『八十八ケ所』を参拝しながら、主な名所旧跡を探っていると、車を利用し続けて十六・七日かかる。

○ お四国

八十八ケ所の事を、現地では、お四国と言い、巡拝者をお四国さんと呼ぶ。四国に、へ行く事が出来た。

一行三十名、東北から、中部から、九州から、遠くはブラジルからで、みんな初対面ながら、目的を一つにしている為か、年来の知己の様な心易さを感じた。吉井勇の歌に『四国路へ渡ると言えばいちはやく　遍路ごころと　なりにけるかも』とあるが、清浄無垢の遍路心が通じ合うのと見える。

土地の人々も亦、お遍路さんには昔ながらの愛情と信頼を失っていない。

へんろみちの傍には、到る所に無人売店があるのも其一例である。夏みかんなど山と積まれ、定価が表示され、銭箱が備えてあるが、未だ嘗て間違った事が無いという。

○ 阿波の山河

阿波の山河は、吉川英治の小説『鳴戸秘帖』の舞台となっているから、法月弦之丞や見返りお網が、ヒョッコリ出て来るような錯覚に捉われたのしかった。

阿波十郎兵衛屋敷では、享保年間の建物や、十郎兵衛の

愛したという鶴亀の庭など見ていると、幼児の寝物語りが現実観となって蘇って来る。

近松半二の傑作『傾城阿波の鳴戸』は、史実とは大分違っているが、永く民衆の間に伝承されて来たものである。

屋敷内には、可憐なお弓、お鶴の像があり、悲しき人の世の宿縁を物語っている。

○ 坂本竜馬の銅像

高知桂浜には、坂本龍馬の銅像がある。維新の風雲児龍馬の巨像を仰いでいると、思いは、はるか動乱の維新へと馳せて行く。

銅像の後方に、南海の熱血を称えた新しい詩碑が建っている。

自由の空に寄す　南溟の
永久なる　浪の響
常夏の地や　建依別の
赤き血潮は　流れて尽きず

と書いてある。

（たけよりべつ　は土佐の古名らし）

○ 中村市

松山を出発してから十一日目、土佐の西端、小京都と呼ばれる中村市に着く。私は、今度の旅行で、ここに一泊するのを期待していた。この市には、秋水、幸徳伝治郎の墓があるからである。

承久の乱を避けた京都の公郷達が集団疎開した処で、大逆罪だと言われて、死刑になった秋水も、この公郷の末裔である。

秋水は、軍国調の強かった明治末期に、敢えて日本の将来を憂えた先覚者である。

秋水が、萬朝報で、健筆を揮っていた頃、私は、岐阜師範学校の学生で、校則による『全員寄宿舎生活』を送っていた。そして朝なく〳〵の新聞で、涙香や秋水の論説を、感激深く読んだものである。

昨年、五月三十一日の夕暮れ、中村ホテルに到着直後、私は旅装の儘で、真直ぐに、秋水の墓に詣でた。

『大声、俚耳に入らず』で当時、国賊と極めつけられていた秋水は、其墓石にまで、鉄鎖が巻いてあったというが今は『幸徳秋水先生之墓』という立派な石の道標まであり郷土の偉人として、脚光を浴びている。

幾度も投げられたであろう傷だらけの墓石には、表に、幸徳秋水墓、裏に、明治四十四年一月二十四日死、とあった。

私は、独り、この墓碑を撫でつつ、遠く六十余年前、秋水処刑の報を知った時の、あの若き日の感慨を偲んだ。

○ 終りに

同窓生の皆さん、一度四国一周の旅に出られては如何。

霊場の、あらたかな雰囲気は、庶民の古里として、ほんとうに心の安らぎを覚える。

四国は、古今偉傑の輩出した土地だし、風光は美しく、全土が緑に包まれて、空気もうまい。

信仰と、歴史と、旅とが、一挙に獲得出来る四国は、こよなき清遊の地だと思う。

—完—

（「お四国」と題する拙著、残部少々あり、御希望の方に進呈します。）

関市常盤町　中村保

恩師拝謁

四十九年度部活動の状況

関高の部活動は先輩達の指導や援助のもとで、各部とも活発に活動している。

特に、今年度は、部活動に造詣が深く、自らスポーツ活動（剣道）に参加される巽幸彦校長が就任され、放課後の活動に一層、熱がこもるようになった。本年度の部活動のうち、主なものをひろってみました。

○ 体育系

柔道部　十二年連続、通算十八回目の全国高校総体出場の偉業を成しとげ、個人戦重量級の部で、松井勲君が第二位。栄えある全日本柔道選手権大会に、松井君が史上最年少で出場し、全国の注目を浴びた。

身長184センチ、体重140キロの堂々たる体格を利しての右払い腰や、内股を得意とし、柔道界のホープと期待されています。大学進学の予定。

剣道部　2年生の三島孝子さんが、全日本剣道選手権大会に出場。

その他の運動部も毎日コツコツと練習にはげんでいます。

○ 文化系

コーラス部　前年度の活躍に刺激され、部員一同はりきっています。朝日コンクール県2位、NHKコンクール3位。定期慈善音楽会も成功を収め、行事として定着した感があります。

文芸部　郷土文化の研究にユニークな活動をしている。

白川村合掌部落探訪

「雑草」31号発行

社研部　十六所山古窯発堀。宅地造成にともなう緊急発堀で、49年4月、市教委による調査で発見され、文化庁の許可をうけて、7～8月の10日間にわたり、発堀調査された。

岐阜県陶磁器試験場の古川氏、本校OB吉田英敏氏（高13）の指導により、社研部員13名、同OB6名が発堀に参加した。

江戸期の登り窯で、出戸遺物数千点に達した（線香立て、茶碗、すり鉢など）。

関市における江戸期の古窯の本格的な発堀は始めてで貴重なデータが得られた。

なお、残念ながら宅造のため、現在は見ることはできない。

（顧問北洞先生）

同窓生寄稿

私のしあわせ

高女八回卒　平田絢子

安桜山の　ふもとベーに…

一斉に時ならぬ若やいだ歌声が流れだしました。過日、私達、瀬尻地区の武儀高女同窓生の集いの一こまでございます。七十才近い方も、すっかり十代の娘にかえって喜々として歌いました。いつまでも若々しい人、随分年をとった感じの人、色々の顔が、この時だけは一斉に昔に返った感じでございました。その面々の中で私は第八回の卒業生。若いつもりでおりましたが、いつか恥じながら還暦を迎えるはめとなりました。

還暦！　先日、子達孫達がお祝いにやって来てくれ、紅葉映える孫六苑で一日楽しく過しましたが、子達のこうした心づくしを嬉しく思う半面もう、こんな年になったのかと心淋しさがよぎるのをどうすることもできませんでした。六十年間！　振りかえって随分いろいろのことがありました。苦労知らずの娘時代から戦中戦後の激動期、夫との死別、農地開放、十七アールのお百姓をやった事、子達の結婚、そして福祉事務所でお仕事を持つ現在に至るまで、本当によくもいろいろのことを経験して参ったものでございます。

夫を亡くしてから四人の子供を一人前にと、しゃにむにがんばり通して、さて一応目鼻がつき、一息ついて我にかえりますと、今更ながら自身のこれからの生きる目標の模索をせざるを得ません。人生一度は死ぬ運命にありますが残る人生をせい一杯幸福に生きぬきたい。人間何を幸福というべきだろうか。私はふりかえって、自分が一番しあわせを感じた場合というものを分析して見ました。一、人に、ものに、神に感謝しているとき。二、人様をしあわせにする事が出来たとき。三、より一歩向上をと自己の可能性に挑戦しているとき。こうしたときが私は一番幸福でございます。特に人様をしあわせにして差上げられた時は、我が心は満たされ、自身が「この社会に生きているあかし」とも言える程の充実感を味わいます。

でも、それを全うするには先ず健康第一、健康でなければ始まりません。つまらぬ事ながら私の健康法を披露致します。朝晩のラジオ体操なのです。朝の体操は身体が柔軟になって、今日一日事故を起したりしなくなります。夜の体操では肩こりがすっかりとれて快よく熟睡できます。それに、いい年をしてとおかしいでしょうが、体操をすればちょっぴりスタイルもよくなるだろうと、体操はおしゃれの秘訣と心得ています。

健康で、そうして人にしあわせをふりまく人間になりたい。こんな気持ちで還暦という人生の節に直面した現実を かみしめています。

あの同窓会に於て、若い卒業生も大先輩も校歌を歌った一瞬に味わった連帯感、又心の奥底にもちつづけた若き心は、消えることなく、老後の生きざまに豊かな糧をあたえ続けてくれる事でしょう。

一泊クラス会

高女十三回卒　石山千代子

卒業以来、三十有余年を経て、髪の毛も白くなり、孫の顔を見るようになったので、このあたりで一泊のクラス会を持ってはとの声が出ました。今年の当番、名古屋の山田さんのお骨折りで、九月二十二・三日、京都奥嵯峨探訪となりました。

当日は京都駅、午後一時集合で、遠くは九州より東は名古屋近辺の方々、卒業以来始めての方も二名参加され、恩師小坂先生をお迎えして総数二十二名が集りました。

当日は大覚寺の庭園を拝観して、予定してあった嵐山、桂川の清流を望む「花の家」に入りました。夜は先生を囲み、学生時代の昔に返り時のたつのも忘れ、床に就いてからも話が切れず、夜の白むほどでした。

翌朝は苔寺を見て、大阪在住の友の発案で嵯峨野の「嵯峨」と云う茶店で京名物の美味しい湯豆腐を味わいました。午後は大河内山荘の自然をたくみに取り入れたお庭で、お抹茶をいただき、次は祇王寺、落柿舎を見学、嵯峨野の奥に隠棲した人々の昔を偲びながら散策いたしました。

三十幾年の空白も一瞬にふき飛び、女学生の昔に戻った旅でした。この楽しさをもう一度ということ、来年は白川の奥の越原とゆう、ひなびた山ふところで再会を約し、つきぬ名残りを惜しみながら散会いたしました。

—ご参考までに—

人出の多い彼岸を選んだのは大失敗でした。予定した市内観光バスも満員で乗れず、京都駅時計台下での集合も、人混みの中で、卒業以来始めての方は勿論、岐阜近辺で毎年行なっているクラス会出席者の友達でも探し出すのに一時間余りもかかって苦労をしました。

随想

高女二十五回卒　吉田富喜

何でも時間がないから、ひまがないからできないというのは、やろうという絶対の意志がないからとわかっていながら、時間があれば読書三昧にふけりたいと思いつつ、その時間がとれない。絶対の意志がないのと時間の使い方が合理的でないのだろうが、週日は毎日八時間の役務に労働力を提供し、その前後の就寝の時間を除いて十時間ほども妻、母、主婦としての仕事にあて、一人の女としての時間は、ほとんど持てないという私のおおかたの過しかたであろうかといったことで、とくに女性は本能からの母性が強くうち出され、順応するものとされ、否定はできないが、勝手に与えた母性の過多によるものでありながら、うらはらな結果が生じたときは、無償であるだけに期待に反したことがやり切れないと思う。

読書も思うにまかせない日々でありながら先のことを考えるなんてと思い、この正月は久しぶりに読書をたのしんだ。

好きな幸田文さんの「おとうと」「北愁」、じっくりじっくり見きわめた人でなければ書けない文章が随所に見られ心が豊かにふくらむ思いだった。

乱読は気もちにまとまりのないまま終るからと思いつつ、ほとばしり出た勢いは止まらず、藤村詩稿に及ぶ。

過ぎし学生のころ、落合川からせみしぐれの中を旧中仙道の石だたみをふみしめて馬籠へ、一夜、永昌寺で田毎の月を眺め、木立ちがうっすらと姿を見せはじめる早朝、はすの花の開く音をきいた想い出にひたる。

小諸なる古城のほとり
雲白く　遊子かなしむ。

二・三年前、三たび南木曾から馬籠へ足を運んだときも木曾路はなおすべて山の中にあり多くの人々とも出会ったが、この遊子の姿はどこにもなかった。

「詩歌は　静かなるところにて想い起したる感動なり。」の藤村の思いが今でもわくことのできるようなたたずまいと、きもちを持ちあわせたい。